

ファクトリー

岡本俊弥

男は久しぶりにVRヘッドセットを買い換えようと思った。

マニアではないので、ふだん新製品のチェックはしない。それでも最新ゲームを楽しみたいし、新しいハードの方が快適だろう。安い機器も出回っているらしい。

ネットを探すと、思っていたより価格は下がっていた。こういう電子機器は数年も経つと大幅に下がっているものだ。高価だったものほど、一年で半額くらい下がったりする。

だがこれは安い、男が想像した十分の一になっていた。

すごいな。まあすぐに壊れるのかもしれないが、この値段なら。

気がつくくと、おすすめに並ぶ機器の多くが下がっている。なんだ、おれの知らない

間に世の中が変わっていたんだ。男は無邪気に喜んだ。

*

リユーゲイニーとは、屋号に使うにはおかしな名前だ。

いつ頃からロゴを見かけるようになったのか、よく憶えていない。この会社の創業に関しては、不確かなネットの噂が多く、公式情報がないのだ。英語のホームページを探しても、会社設立に関する説明はない。国別の営業窓口だけが書かれている。

評判はズいぶん前から流れていた。

多品種少量の生産工場だ。何でも作る。

食品から電子部品、家電から車載品まで何でも受ける。

世界中どこでもジャストインタイムで納品する。

「なんでも、ってアバウトな言い方だな」

柳原は、同席した部下にそう話しかけた。

窓からは夏空が広がっていた。冷房温度を抑えた会議室は蒸し暑く、しかも午後一番の会議だった。不快さと眠気で、頭が回らないままだった。

ついさっき、海外工場とのTV会議が終わった。

「ただ少なくともあれがですね、そこで作られたという話なので」

競合メーカーで作られた製品が国内投入される。TECでも対抗方法を準備しなければならぬ。

いつも付け焼き刃だ。柳原は思った。

タカマガハラ・エレクトリック・コーポレーション、通称TECは、コンシューマー機器を作る会社ではない。生産装置や生産用測定器の会社だった。

日本にコンシューマー向け商品を作るメーカーは、もう残っていない。

そんなはずがない新製品が出てるじゃないか、と思うかも知れないが、それは単なるブランド名にすぎない。ほとんどが海外の企業に買収され、商品名だけで残っているのだ。

コンシューマー機器は、コストパフォーマンスの良いものが売れる。割高でも買っ

てくれる「愛国」ユーザなどほほいいない。

その点、TECが作る産業機器は売り上げ規模が小さいため、海外企業も手を出してこなかった。ニッチだから見逃されてきたのだ。

リユーゲイニーは製造委託を本業としている。

こういう会社は、量が見込めるコンシューマー用品を作ってきた。かつてのスマホやPCなどだ。規模のメリットで材料を安く仕入れ、安い労働力を使って低コストで製造する。安いだけではなく、高価な生産装置を入れられるので、高精度高品質になる。一億円装置でも一億台売れる商品に使うのなら、一円のコストインパクトで済むからだ。こういうスケールに、旧来の製造業では太刀打ちできない。ただし、それはマスプロだからだ。少量生産ではスケールメリットが出ない。

しかし今回は事情が異なっていた。TECの得意とする一品ものの三次元造形装置の競合品を、そこが製造しているという。

「なぜ安く作れるんだ、どういう材料を使ってるかわかるのか」

「中身の構造が大幅に変わるわけではないので、材料の差は少ないと思います」

「じゃ、なんで価格に差が出る、おかしいじゃないか」

「分かりません。調査中です」

海外工場の担当者は歯切れが悪かった。

同じ海外で生産するのに、同じコストで作れない。

納入先でよく聞いた話だった。他人事だったから「大変ですね」で済ませていた。今度は自分の番だ。

「責任者は日本人だろう。それじゃ現地の本当のことは分からんぜ。だれか詳しい現地人を見つけて調べた方がいい」

会議の後、部内のフォーミーティングは揉めた。責任を問う声が上がったのだ。

日系の会社は、勝手の分かった日系の部材を使う。その結果、代わり映えがしない。工場が海外にあるだけでは、人件費が上がるとメリットが出なくなる。海外は変化が激しい。五年で何もかも変わる環境に対して、二十年停滞していた日本では、そもそも感覚が追いつかない。

「ごちゃごちゃ言ってるよ。君が調べろよ。話が早いじゃないか」

議論が空回りすると、部長が苛立たしげに口を挟んだ。

組織のフラット化とかで、部門数が減った分、管理職の仕事は増えた。会議が多く、書類を求められることも多い。この会社では会議の忙しさにかまけて、トップになるほど内にこもるのだ。

人に言う前におまえがやれよ、野崎はそう思ったが、口には出さなかった。

「……分かりました」

*

まず代理店を探してみたが、TEC出入りの部品商社とは取引がないようだった。直営の支社に連絡を取ると、すぐに営業からコンタクトがあった。

「お会いできませんか」

情報を取りたいだけなので少し迷ったが、とりあえず会うこととした。

やってきたのは初老の男だった。腰が低く誠実そうに見えた。支社長の名刺を見せ

て、以前は、大学の研究室にいたと自己紹介した。

「大学の先生だったのですか、ご専門は」

「畑違いなのですが理科系ですよ。数学関係の研究していました」

「ああ、また難しい分野ですね。わたしには見当もつきません。でも営業とはずいぶん違う」

「研究テーマの実用化の関係で、リユージェイニー・テクノロジー・グループと縁がありましたね。世の中どうなるか分からない、今回のご縁を機に、御社でも十分ご検討いただけると思います」

「当社の競合メーカーも御社を使っていますよね、問題ないのですか」

「ラインは別々ですし担当部署も異なる、機密が漏れることはありません」

「部材の調達から、御社で行うのですか」

白髪の支社長は、薄い笑みを浮かべた。

「LTGは基本的にはOEMやODMではなく、すべてをご用意します。必要なのは企画段階の仕様のみで、以降の設計から、材料の調達、製造まですべてお任せいただ

くのが、もつとも効率的な運用なのです」

「われわれの製品は汎用品ではありません」

「お考えになっているよりも、汎用的な部分は多い。何かでベンチマークしていただけくこともできます」

「具体的な例を見せていただけませんか」

すると、支社長は手に持った端末に目を遣ってから答えた。

「どれもお客様の製品ですからね、そのままの開示はちよつと難しい。ただそのかわり、工場を見学することはできます」

「見学ですか……ふむ」

少し考え込んだ。

支社長が帰ってから柳原はネットで調べてみたが、信用できそうなL T Gの情報はほとんどなかった。会社の伝聞というのは、モラルが低下した時期でもない限り、あまり外には出てこないものだ。たとえば、経営危機のときは非主流の幹部が保身のためにリークする。経済評論家、新聞記者、それに一般社員は何も知らないのがふつう

なので、そのレベルの伝聞情報は疑わしい。

一つ分かったのは、この会社が未上場だということだ。日本はもちろん、中国でも米国でも台湾でも上場されていない。開示されたデータが少ないのも当然だ。

まあしかし、会社を調べるのが目的ではない。

コストを下げるヒントが見つかるか、無理と分かれば、うちも工場を畳んでLTGに代えればいいのだ。それを決めるのは柳原ではない。

東京にある支社で、見学の打ち合わせをした。小さなビルのワンフロアしかない事務所だった。営業は数人しかおらず、全員出払っていると説明された。

「国内に支社はここだけですか」

「ええ。売り上げに比べると、人員は同じ規模の商社の十分の一もありません」

「これで回るのでですか」

「なんとか」

見学可能な工場は大陸の各地に点在していた。数カ所と思っていたが、数十カ所にも上るようだった。

「なぜこんなにあるのですか」

柳原の知っている常識では、工場は買収や合併で一時的に増えても、やがては集約される。重複があると、効率が下がるからだ。

「目的によって、どこを使うかわかりますからね」

「オペレーションはどのなのでしょう。ラインを空けないだけでもたいへんそうだ」

「それは本社統括部門の仕事です」

「ああそうだ、お聞きしなかったのは本社の所在地です。どこにあるのですか」

「登記上の住所は南海省にあります」

「南海省というと……」

「南海省自体は国境に近い島にあります。ただ、住所の上ではそこが管轄する南海の群島にあるのです」

「しかし、あんなところに工場は」

よく話題になる東南アジアの係争地だった。もうだいぶ前に、大使館前で暴動騒ぎがあったことを思い出した。

「ええ、ないでしょう。でも登記上はそうなのです」

「失礼ですが、支社長は本社に行かれたことがない」

「残念ながら」

支社長は申し訳なさそうに言った。

大規模なグローバル企業は、こんなものなのだろうか。

LGTの組織は複雑なようだった。本社の下にグローバル統括本部があり、統括本部の下に事業本部、事業本部の下に地域本部があり、さらにその下の国別支社がある。

支社の人間は地域本部が雇用している。この支社の属する地域本部は大陸にあるのだった。

「地域本部の支社統括部長が私の上司になります」

「今どきの企業らしくないですね。ややこしくて階層が深すぎる」

「問題は生じていませんから」

こんな組織では、支社の権限はほとんどなさそうだ。工場の何が見られるのか不安になってきた。

まず、地域本部に行くことになった。

地域本部は大陸南部の沿岸にあった。ふつうユーザが出張する場合、営業がアテンドするのだが、支社長は同行しないのだという。

「向こうは向こうで担当者がお迎えします。ご心配はいりません」

直行便が取れず、特別行政区から地下鉄に乗り換えて国境を越えた。

確かに迎えは駅で待っていてくれた。日本語が堪能な男で、現地の営業と思ったがそうではなかった。

「わたしは依頼を受けた運転手です。目的地までお送りします」

タクシーの表示もない一般車だった。

「あの会社には社用車はありませんよ。主にわたしのような運行サービスの車を使います」

車は高層ビルが乱立する市街地に入っていた。沿岸部の主要都市は、いつ行っても人が多い。歩道も車道も混雑している。車の群れをかき分けるように進み、ビル街の一角で車を降りた。いったいどこなのか、全く見当もつかない。

雑居ビルの一つのフロアがLGTの地域本部だった。

だが、ここも人が少なかった。一応のパーティションで区切られた、素通しのフロアに数人の社員が働いているが、大半の席は空だった。

支社統括部長と名乗る男が挨拶をしてきた。名前で想像したほどの威厳はない。どこにでもいる中間管理職に見えた。

「どういった工場の見学をお望みですか」

統括部長は、携帯端末を開きながら言った。

「決まっていないのですか。公開可能なものから、選んでほしいとお話ししていたはずですが。こちらも時間の制約がありますのでね」

「うかがっております」

「いきなり決めて、段取り可能なのでしょうか」

「問題ありません」

「では、候補だけでもリストアップいただけますか」

部長は壁に表示された地図まで案内した。拡大すると、小さなピンのCGが無数に

刺されて見えた。すべてが工場なのだと言われた。支社で聞いたよりさらに多かった。

「これがみんなこの管轄なのですか」

「ここはあくまで支社を管轄するだけです」

権限の範囲がますます分からなくなったが、他社のルールに文句を言っても仕方がない。考え込んでいると、部長は一つのピンを指した。

「どうですか、他でも大差はありませんか」

隣の地区の北側で、ピンが密集しているどこかのようにだった。

すぐに先ほどと同様の車が呼ばれ、目的地が運転手に告げられた。今回も部長や営業は同乗しなかった。

「お気を付けて」

高速に乗ると、ひたすら車は走り続けた。運行サービスはいいのだが、これだけ遠くまで走って問題ないのか心配になってきた。

そのまま三時間近く走ったあと、ようやく目的地らしきところにたどり着いた。舗

装された道で揺れはしなかったが、飛行機を降りてから乗り物ばかりだ。いいかげん疲れが溜まってきた。

だが、近代的な工場団地と思っていたのに、そこは古い田舎町のようなところだった。平屋の住宅が密集して並ぶ中の一つが工場だった。

開け放たれたガレージのような土間に数台の工作機械が置かれ、油で汚れたシャツを着た男女数人が作業している。

スーツケースを置いたまま、入り口で立ち尽くしていると、一番年長と思われる男が声をかけてきた。

「遠くまでご苦労さまです」

訛りのないきれいな日本語だった。

「ここで、LGTさんの委託を受けた製品を製造しております」

「ここですか」

「自由にご覧いただいて結構です」

見るも何も、民家の一階相当の広さがある作業所ですべてのようだった。棒状の金

属を加工して、微細な金属部品を作っている。

「材料は支給品ですか」

「われわれで必要量を調達します」

納入記録や検査記録は小さな端末に保管されていた。見学なので詳しくは見せてもらえなかったが、どうせ日本語ではないだろうから精査はできない。工作機は柳原の見たことがない三次元造形機だった。工員のスキルに左右されないのだろうか。どんなに機械が優秀でも、管理が悪いとばらつきが出る。

言葉が分かる工員のいる工場を、たまたま選んだだけなのか。わざわざ小さな町工場を選ぶ理由が読めなかった。

「ご満足いただけましたか」

「ええ、ここはもう十分見せていただきました」

「それでは、お戻りになることもできますし、統括本部にご案内することもできます」

「統括本部に行けるのですか」

「ご希望がおりなら」

工員は手に持った携帯端末を操作した。通話だったのかも知れない。しばらく待たされた。

「お迎えに上がりました」

振り返ると、サイドカー付きの大型バイクが止まっていた。ライダーは自己紹介もしないまま、スーツケースを荷台にくくりつけ、すぐに走り始めた。モーターの回る音がする、電動バイクのようだった。

サイドカーの座席でGPSデータを見たが、土地勘も何もない道だ。来たときと同じ方向なのかさえ分からない。大陸と思えない曲がりくねった道を二十分ほど走ると、山中の広場のようなところに出た。

風が激しく吹き付けてくる。見上げると、大きなクアッドコプターが着陸しようとしていた。

「あれでお送りします。無人機ですがご心配なく」

ライダーは荷物を移し替え、中央のコックピットに案内する。といっても、計器も操縦桿もなく、リクライニングシートだけが設置されている。ライダーが手にした端

末を叩くと、キャノピーが閉まりいきなり離陸する。高度を稼ぐまで垂直に上昇、プロペラの向きをゆっくりと垂直に変え、飛行を始める。

目的地は聞いていない。地上は既に暮れて暗く、明かりが少ないようだった。まだ薄暮が残る空と夕暮れの雲を背景に飛行する。

希望したとはいえ、いったいどこまで連れ回すつもりなのか。

シート自体は快適だった。飛行は順調で、柳原は眠気に誘われた。

風が顔に吹き付けてくる。

「お疲れのところ恐縮ですが」

もう夜が深まっている。クアッドコプターは既に着陸していた。ごうごうと響くのは航空機のエンジン音のようだった。

迎えの女は、自分は統括本部長であると自己紹介した。

「当社の全貌をお知りになりたいとおうかがいしましたが、なかなか一日で見学いただくのは難しい。一年あっても無理でしょう。いかがでしょう、本社にお招きしますがどうなされますか」

「今からですか。もう遅いように思いますが」

統括本部長は、端末に目をやった。

「恐縮ながら、時間的な制約があるとお伺いしております」

出てくる幹部は、誰もが淀みのない日本語を喋った。

柳原はこれまで何度か海外のパートナーと話したことがあるが、たいてい通訳や日本人の営業を伴っていた。これは、あきらかに意図的なのだった。

荷物が引っ張り出され、空港のエプロン部分とおぼしき、コンクリートで舗装された広いエリアを歩かされた。

空港ビルらしき建物は見えない。滑走路には標識灯が点々と灯っていた。ここはどこなのか。スマホのGPSはエラーを出して止まっていた。

エンジン音を響かせている機体が正面にあった。小ぶりのビジネスジェットだった。タラップが降りていた。

「いったいどこへ……」

「それではお元気でいってらっしゃいませ」

統括本部長はここで終わりなのか。

追い立てられるように柳原が席に着くと、すぐにドアが閉ざされ、機体は滑走路に滑り出ていった。

目が回る。しばらく眼を瞑るとまた眠気が襲ってきた。

夢を見た。

柳原は会議に出ていた。そこは被告席で、目標達成ができなかったリーダーが、弁明する場なのだ。何をしたのか、どう交渉したのか、どんな設計をしたのか。詳細に説明するのだが、しよせん言い訳なのだ。裁判官にあたる上司は、最初から聞く耳を持たない。謝罪しろと、厳しい言葉で罵るだけだ。どうすべきだったのかアドバイスはない。批判する側にも答えはないからだ。結果だけを責められる。上司もさらに上から叱責されている。同じセリフで部下を怒るしかない。大きなだけで無意味な組織だった。時間だけが流れ、険悪な雰囲気だけが残る。耳元でどなり声が響く。声は何を言っているのか聞き取れず、いつしか轟音に変化している。

エンジン音だ。いまいるのは機内なのだ。

今度の飛行は長かった。目が覚めてしばらく経っても、窓外は暗いままだった。下には全く光が見えない。どうやら海の上を飛んでいるようだった。

だとすると大陸ではない、南側に向かっている。

相変わらずGPSは機能しなかった。やがて、機体が旋回を始めた。回りながら高度を下っている。そのまま軽い衝撃があり着陸した。

パイロットに促され、タラップを降りる。潮の香りがした。

わずかに白みはじめた空の下は、遮るもののない海だった。

他に機影の見えない長い滑走路と海、背後に低い建物がある。他には何もない。

滑走路に人影があった。

「おはようございます」

聞き覚えのある声だった。あたりの明るさが増していた。

「あなたは」

支社長が笑顔を浮かべて立っていた。

「ご足労をおかけしましたね。最初からお連れしても良かったのですが、それでは実

感がつかめないと思ひましてね」

「実感、どういう意味ですか」

「LGTの全体像を実感していただくという意味です」

「なぜそんな手間をかけるのですか。わたしは単に見学をしただけで」

「われわれは、柳原さんがキーマンであると承知しているからです」

「お分かりのようにそんな地位にはありません。何の権限も持っていない」

「現在の地位は関係ない、影響を及ぼすキーマンというのは、地位に関係なく存在するものですよ」

支社長はゆっくりと頷いた。

案内されるままに、低い建物に導かれた。

「ここはどこなのですか」

「星沙市です」

「本社があるという……」

「ここが、本社です」

「しかし、岩礁を埋め立てた人工島なのでしょう」

「それについてはさまざまな見解がありますね。人工物の設置は、関係するすべての国が行っていますし、誰もそこが単なる岩礁だとは考えていません。まあしかし、そのこととLGTとは関係ない」

軍が関与する地域に、民間企業の本社が置かれているのは奇妙だった。しかもどこにも軍人の姿はない。そもそも人の気配がないのだ。

「本社には行かれたことがない、と仰っていましたね」

支社長は表情を変えなかった。

「申し訳ありません」

「せっかくあちこち見せていただいたのですが、全貌など何も分かりませんでしたよ」
「お気付きになっていないだけです」

そう断言されると、見学の段取りに文句を付ける気力が失せた。いくらか寝たとはいえ、疲労が溜まっているせいだろう。

広い応接室だった。大きな椅子に腰を下ろすと、斜め前に支社長が座った。本社な

のに他に誰もいなかった。そもそも孤立した島で、通勤する従業員などいないだろう。

「人がいませんね」

「これまでご案内した拠点はどこもそうだったでしょう」

「ええ……確かに」

「ご存知のように、会社は人、原材料や商品、資金で成り立っています。人以外の二つは、しょせん単なるモノです。モノは、不足すれば、いくらでも作り出すことができます。材料や商品はもちろん、お金は意図的に流通量を増やしたり、デリバティブのような形で仮想的に増加することができます。しかし人だけは違うのです。人は自在に制御できませんし、増やすこともできない。無理強いすると心理的不満が鬱積していきます、活力を著しく削いだり爆発したりする。人をモノのように扱えれば効率が上がると思う経営者は多いのですが、人心が離反すればかえって下がる。なかなか上手くはいかない。つまり、人だけがコントロールできないリソースなのです」

いきなり何を言い出すのかと柳原は訝しんだ。

「経済がなぜ予測不可能な動きをするのか、それは人が介在するからです。予想でき

ないということとは、すなわちリスクです。会社でも予測可能なのは、きわめて小さな集団のときだけです。せいぜい十人、多くても数十人以下でしょう。多くなればなるだけ調整のための余分な人材が増え、余計にリスクを作り出す。そこで、われわれは会社を最小限に分割しました。こういうミニマムの集団の集合体の方が、同規模の大集団よりリスクが下げられるのです。本社も支社も、営業も技術も、生産も品質も細分化する。その結果、最大のリスク要因が最小化されるのです」

「小さいと個々の組織は風通しが良くなるでしょうが、束ねた複雑な組織を、誰がコントロールできるのですか」

「便利な道具がありますからね。わたしが大学で研究した数学は、複雑なネットワークの最適解を見つけるものでした。ある種の応用数学です。ただ、計算量が非現実的なほど大きく、解ける問題はごく小さなものだけでした。それを解決してくれたのが量子コンピュータです。これで有意な時間内に解を出せる」

「量子コンピュータをお持ちなのですか」

「本社統括部門というのは、量子コンピュータとサポートAIの集合体を指しています」

す」

「会社の意思決定を計算で求めているのですか」

「何を受注すべきか、何を発注すべきか、どれだけつくるのか、そういった社命を計算しているのです」

「何を計算するのですか」

「そのときどきで最適なサプライチェーン、最適な人員配置、最適な物流。時々刻々変化しますが、インプットされるパラメータに応じて解を導くだけです」

「工場も違う、人も違う、経費も違う。これでなぜ最適になるのですか」

「人間を含めたりソースをユニット化できているからです。誰も不満を抱かず、現状に満足なら不安定要因はない」

「人間の行動が計算どおりになる……単位が最小だからですか」

「各ユニットに相当する工場や事務所は、単純に届いた指示に従っていけばよい。そうすると、どんな大工場が作った製品にも負けない品質のものが、もっとも安いコストで作り出せる。」

いいですか、資本主義にはよく知られた問題点があります。資本は自分を肥え太らせようと暴走し、その手段に過ぎない株価の高騰を自己目的化する。得られた利益は万人に行きわたらず、不満が蓄積し社会は不安定化する。こういう不安定なシステムは、人をマスに置いたシステムでは避けきれない。人がミニマムなユニットになってこそ、安定した社会が築ける。これまで人類は大きな集団になるほど力を発揮できると考えてきたわけですが、これは間違いなのです。最小の単位であることが全体の幸福につながるのです」

陽が差し込んで来た。開け放たれた窓から、潮を含む風が吹き込みカーテンを巻き上げた。

「あなたは、支社長じゃありませんね」

柳原は疑問を口にした。

「これだけ重要な部門を担っているとすると、あなたは……」

すると、支社長は手に持った端末に目を遣ってから答えた。

「そう、この会社はわたしが創業したものです」

「……すると、CEOなのですか」

「わたしはファウンダーという地位にあるだけです。意思決定者、いわゆるCEOをはじめとする役員は一人もいません」

「意思決定者がいない、計算が意思を決定するからですね。しかし、意志が計算だとすると、その計算は何を目的にしているのですか。ふつうの会社なら売り上げや利益を最大化することなのでしょうが」

「おっしゃる通り、計算には最適化すべき評価関数があります。最低のコストで最大に売り上げ、個々のミニマムな人々の取り分を最大にする。結果として、競争相手であるすべての会社を、LGTに置き換えていく」

「つまり、独占ですか」

「そうではありません。会社は別であっても良い。事実LGTは一つの会社ではありません。すべてをLGTという仕組みにする、大きなものを解体し、小さなものだけにするのです」

「すべてを」

「そう、すべてをです」

「すべてがLGTになったとき、量子コンピュータは何を意思決定するのですか。本
当に、それが持続できる仕組みといえるのでしょうか」

「ファウンダーは、また手に持った端末に目を落とした。」

「なるほど、あなたはわれわれが期待したとおりの見方ができるようだ。量子コンピ
ュータは特定の問題しか解くことができない、プログラムできる余地が少ないからで
す。すべてがLGTとなり、市場のパラダイムが変わると対応できないでしょう。し
かしそれはまだ先のこと、十年はかかるでしょう」

「十年、こんな仕組みがあるなら、市場制覇などもっと簡単にできそうに思えます」

「市場が変わるときには、周辺にある市場以外も変わっていきますからね」

「周辺というのは、社会とかですか」

「社会、政治、政府、人の関わるものすべてです」

「まるでイデオロギーについて話されているようですね。革命でも起こそうというの
ですか」

支社長は視線を端末から外し窓外に向けた。それほど遠くないところに海面が見えた。

「この島が始まりでした。ここは三つの国が領有を主張していた岩礁でしたが、いまはこの国にも属していません。どうしてそうなったのか、疑問に思われたでしょうね」

柳原は頷いたが、何も言わなかった。

「最初、われわれは大学で、人的ファクターのコントロールが可能かを実験していました。選ばれた対象は政治的な駆け引きです。トップダウンに物事が決まる政治形態を選び、コントロールラビリテイ、つまり可制御性を調べたのです。シミュレーションでは有意な結果が出てきました。

イデオロギーは初期値にすぎません。政治の背後には利害関係があって、利を最大にするために動いています。なかには、実利よりも、国威といったメンツに左右される事項もあります。これも、結局は世論という人の力に関わる利害なのです。ただし、政治のコントロールには危険が伴います。誤って不安定化させると、多数の人々を不

幸に陥れてしまう」

「政治のコントロールをしていたのですか。大学でそんなことができるのですか」

「お気づきかもしれませんが、当初この研究には政府の資金が使われていました。マスコミやSNSなどの世論を、数値に基づいて精密に誘導できるとしたら、政治形態を問わずどのような政府にとっても需要がある。ただ、実際の効果については疑念が抱かれていました。資金を継続的に調達するためには、何らかの成果を示す必要があったのです。政府の担当者レベルと打ち合わせが行われ、秘密裏に実験が行われました。対象は南海諸島紛争に関する世論誘導で、単純に外国政府の政策に対する支持率を有意に下げることが目標でした。世論に、干渉が加えられたのです」

「外国の世論に干渉……」

「イギリス、アメリカなど、選挙への干渉は数値理論化以前にもありましたからね。今回はそれほど悪質ではないはずでした。議席とも関係のない、単なる支持率の操作です。しかし、初期のモデルは不完全でした。後のミニマム化が取り入れられていない。結果として、世論はコントロールを失い、暴動へと発展しました。この国にまで

同様の動きが広がったことは、よくご存じでしょう。敵味方を問わず汚染されるという意味で、技術を兵器のように用いるのは危険だったのです。実験は中止され、研究も封印されました。影響が自然消滅するまでには長い時間がかかりました」

「信じがたい話ですね」

「わたしはその責を問われて職を辞しましたが、収監されなかっただけでも幸運だったといえます。罪を問うと事が公になりますからね。事態鎮静化のために、南海諸島から軍関係者は撤収し、われわれが民間企業として移転できたのは数年が経った後でした」

ファウンダーはしばらく口を閉ざした。陽は白々とした小さな島の隅々までを照らし出していった。話の途中でも、片手の端末が気になるようだった。

「ここにきて、ようやく技術が追い付いてきました。ミニマムな体制をやがて社会に広げていく、政府も政治もミニマムにすることが可能になると、確信できるようになってきました」

「ここにきて、とおっしゃいましたね。今度はどうするのです」

「最初の議論に戻ることにあります。社会を変えていくのが次の段階です。計算できる社会にしていくのです」

「今度も政府から資金が出ていますか」

「自分たちを壊す変革に援助などありえないでしょう。どこの政府であってもです。ですが、政権中枢からも賛同者は出てくるでしょう」

柳原は計算できる社会を想像しようとしてみた。会社ならまだ分かるが、それが政府や国家になるとどうなるのか。いや、そうではなく国家は解体されるのだ。ミニマムな集団の集合体の一つできて、それが世界になるのだろう。何をするのかはすべて計算される。計算された結果は……。

「わたしは何をするのですか」

「まずTECをLGTに変えていくのです。どのようにすれば可能かは、指示が下りてきます。短期間で変わっていくでしょう。要所に働きかければ可能です。そのあとは、あなたの国にLGTを広げていく仕事をお願いしないといけません。指示が下りてきます。何も問題はありません」

ファウンダーは、そう言うも持っていた携帯端末を柳原に差し出した。

端末は柳原が思っていたものとは違っていた。

表示画面がない。かわりに、螺旋状に埋め込まれたマイクロLEDが、さまざまに色に光りながら明滅しているのだった。